



特 別
^4
8130





4
8130

當流相傳和歌會出座ノ次第

一 樽中を巡て出座の時樽中をとり中に入
 けし上下を折せし式は樽中より式は樽中へ入
 又い視下し入る樽中より式は樽中へ入る
 一 一人数集りし一札を座に置き後が来るまで樽中
 樽中を取出し座に置き用ひに一人一人を
 かくりし式は座に置き用ひに一人一人を
 樽中に以て文巻に置き用ひに一人一人を
 樽中を文巻に置き用ひに一人一人を
 樽中を文巻に置き用ひに一人一人を



録に「由らむ」とたゞいふは「文彦」に及び「懐中」の「文彦」
也とあるが如く「懐中」に「文彦」なるは「懐中」の「文彦」
と「懐中」の「文彦」なるは「懐中」の「文彦」
但「懐中」の「文彦」なるは「懐中」の「文彦」
殊に「懐中」の「文彦」なるは「懐中」の「文彦」
か「懐中」の「文彦」なるは「懐中」の「文彦」
或は「懐中」の「文彦」なるは「懐中」の「文彦」
むして「懐中」の「文彦」なるは「懐中」の「文彦」
「懐中」の「文彦」なるは「懐中」の「文彦」

一 懐中を「懐中」に「懐中」三「懐中」は「懐中」
懐中

や「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」
懐中「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」
懐中「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」
懐中「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」
懐中「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」

懐中「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」

懐中「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」

懐中「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」

懐中「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」

懐中「懐中」の「懐中」なるは「懐中」の「懐中」

詠神祇祝和歌

式部綿親王貞浦

うみつはまむらひね
ら兼乃しむるは神
道の山乃しむる
羊飼え

詠を春天

和歌

天台座主尊應

久くはあふれり
ら山あふ日あふり
るのうらにはやき
津の海

詠の東を感久和歌

沙弥水沼

うらむらねちとねと
とたつら仙人乃と
いともくは道乃八
草成は

か橋もあふり
む口傳り

又

夏日同詠夕立雲

和歌

正三位後京云條

きこたしのさしる

あつしきまつしきあせ

夕立のさしる

不登心

いしあつしきあせ

いしあつしきあせ

いしあつしきあせ

いしあつしきあせ

いしあつしきあせ

かくれおとく初乃頭を湯治りうち書入てもふ昔はさしる
ふも人又判者たる切者なりと 和歌にも傳言にも書り
争け字の書教の傳 け字の書教の傳 け字の書教の傳
か怪りあり平人の争け字を考へて二さる傳言に
和歌にも自然に平人書りてさる傳言の合とりに傳
三首和歌いたし

夏日同詠三首和歌

九衛門権佐丹後守恭次

約餘化

世のうち又やしくもちり
たてゑてある物に山に
のあらはらるるは

結部

幸ふたにまじりて
かききすなり

悲恨

美にたに思ふもせめて
いふもやい川を人目
に尚ほまじりて

又法神
い
い

詠三首海歌

法橋水沼

立春

あまつちのまうちて
さきれしつわくを
さきいんを

甲

ちひしきふらりて
うらひいぬるもの
いしやふらりて

春

一ねにのりもち
りのおもふれに
つちれをまら

懐中りしに書き
心持あはれ

真也 上

如け官と氏と名に
云

左衛門権佐官

藤原 氏

正胤 名

秋日同詠池月篠久

和歌

左衛門権佐藤原正胤

池のい花は

秋とし万代に

あはれり

まの

行也 中

秋日同詠池月篠久

和歌

左衛門権佐正胤

い水の花は

秋とし万代に

あはれり

まの

秋日同詠池月篠久

和歌

い水の花は

秋とし万代に

あはれり

まの

まの

斗
名
官
り

斗
名
官
り

進平の
懐帛の
子経文
云加
一云
懐帛
云一思
け神也
指侍
懐帛
懐文
云入

詠無三悪強預優哥
西方行者如河
あーとて難波の
うのちも
ふれをわ
懐句
是々を達して流るるれ
法乃進入る世に
いとまのふね

或は法
華經の
凡八所
ふと
海邊の時
懐帛の
入て文
句をい
影をい
たこと
大
か

詠方便の和音
栄雅
其智恵門
いにんふちうられ
相川入る
道一はり
懐句
おきくこと懐一
月もわかれぬまの
まのまの

名月懐帛八月十の夜日詠河を
和分とて或は例式うやく秋日秋夜
月とて書しとこ

八月十の夜日詠三首和歌

参議藤原直親

海邊好月

月あつて名にやいたる
土阿の白のうれあつた
あまいそはほ
名月連懐
あつたのかりつる月よ
うらまのいそ世れ中に
んのおめん

七月の懐帛もたけの懐帛に七夕
日詠をわ分とて云一曰字れ
子ゆいたとてに

七夕日詠三首和音

権大納言光廣

七夕

あつたのたけのいそはつた
七夕のあつたあつた
あつたあつた
七夕章
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

五言のわが家のやうな様も
 二の七の世に中二枚の地を
 飛鳥井家の二の目家二の
 書てはのぶるはくはく
 五言も七言も次目をうと
 二の七の世に中二枚の地を
 飛鳥井家の二の目家二の
 書てはのぶるはくはく

詠五首和歌
 栄雅
 山家春
 さあそびもいとほしうらん
 山ゆきしとあはれうら風
 花にゆきいさる
 山家夏
 夏つ里にいとあはれうらん
 かきききききききききき
 新にちききき

飛鳥井
 家の二の目家二の
 書てはのぶるはくはく
 ツノナリ

山家秋
 人よふすけといふかき
 子〇ちくねわがきた
 うきやうきやうきやうき
 山家冬
 冬はあつたけあつたけ
 むういさる山はまきや
 高しうらや
 山家春
 春はあつたけあつたけ
 おしとゆきうらや
 山里かき

奥の事餘りかきかきかき

如之房の懐中巾のうらなとある事之証三人分
 上野の河内親王の御流流母流女又ハ
 流女如通女らとある懐中巾とある事ハ

懐中
 巾
 流女

懐中巾のうらなとある事之証三人分
 上野の河内親王の御流流母流女又ハ
 流女如通女らとある懐中巾とある事ハ

懐中巾のうらなとある事之証三人分
 上野の河内親王の御流流母流女又ハ
 流女如通女らとある懐中巾とある事ハ

懐中巾のうらなとある事之証三人分
 上野の河内親王の御流流母流女又ハ
 流女如通女らとある懐中巾とある事ハ

一 万葉書の中一その懐中巾の時書中一平人ハ如常ト平流乃
 會始ト云々書中トある事ハ

當座經冊之書

一 拾遺のうらなとある事之証三人分
 上野の河内親王の御流流母流女又ハ
 流女如通女らとある懐中巾とある事ハ

一 家方より来て流草書所は、家通の流草書もあつたが、
 小目に急いで用程のしつらから、流草のしつらも、流草のしつら
 一 和方にも、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 かく、かく、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 あり、あり、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 も、も、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、

一 僧中 経冊 漢師 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、

一人の流草書を、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、

一 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、

一 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、

一 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、
 流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、流草のしつらも、

あつてはてして
あつてはてして

かたし松口も柿原におもひして
さういふ山はふ甲らん
俄もなつては藤のふりふり
のまゝの松もむすか

一 懐帝の喜書の中 懐帝の喜書の中 懐帝の喜書の中

兼在二年九月廿日會 日活めしとありけりいふや

元和六年七月十日會 日活めしとありけりいふや

寛永元年八月十日會 日活めしとありけりいふや

慶安二年二月二日會 日活めしとありけりいふや

兼在二年七月十五日會

是のころの會にも記さるや又の位階の事も記さるも事なれ程感に
たゞ懐帝の喜書に上にも記さるる事も記さるる事も記さるる事も
記さるる事も記さるる事も記さるる事も記さるる事も記さるる事も
記さるる事も記さるる事も記さるる事も記さるる事も記さるる事も

一 懐帝の喜書の中 懐帝の喜書の中 懐帝の喜書の中

二つに押打て申すもさういふ事も記さるる事も記さるる事も

刀にたてはぬに刀目をぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

あつてはてしてはてしてはてしてはてしてはてしてはてしてはてして

えんも記してはてしてはてしてはてしてはてしてはてしてはてして

ふも記してはてしてはてしてはてしてはてしてはてしてはてして

あつてはてして

一十首の憶中一七二枚あり二二枚にと書けるあり

一憶中一紙に長短大小多く本式を以合たふ一と云れども
心安き會にも板本をもちて極る中一を以用ふあり大小を
多し時と下りしは方と書ゆ一とむし一とち一とと
と一紙に記す向めく是く一と一と一と一と一と一と一と
今一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一憶中一かゝる中一上に書きたるをかゝる下一の中一に下位を
書く一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
かゝる中一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一書書に憶中一の書いた方表を録れ字乃あふま一と一と

書一と極石に書く一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一憶中一かゝる中一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一憶中一かゝる中一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一憶中一かゝる中一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

読次に他者を讀次に等しくむらり

一 憶中へ讀中へ申一それ憶中へいたるに

春日同詠椿葉伴鈴和歌

藤原正胤

少くもく板をさしむ

一 方へ中へ五七五七に句を切くきぬ甲乙らる五句

目くや〜板口傳き

一 二首へ憶中へたしむ

春日同詠三首和歌

少くもく板をさしむに他者を讀に題をよむくはれ

憶中へ世後へ他者へをよむ方と世へ〜とゆふ類

一 中へ分ち〜〜讀所返り〜抄傳いふ

傳の好〜

一 女へ人へ文字を讀時海へ一日に海へ

一 海師重役へ發言〜とさなり〜とさ〜若者半〜

一 讀所憶中へ讀〜とさ〜とさ〜時海師經冊と海へ

一 一〜官中〜申〜若者〜若人〜海〜

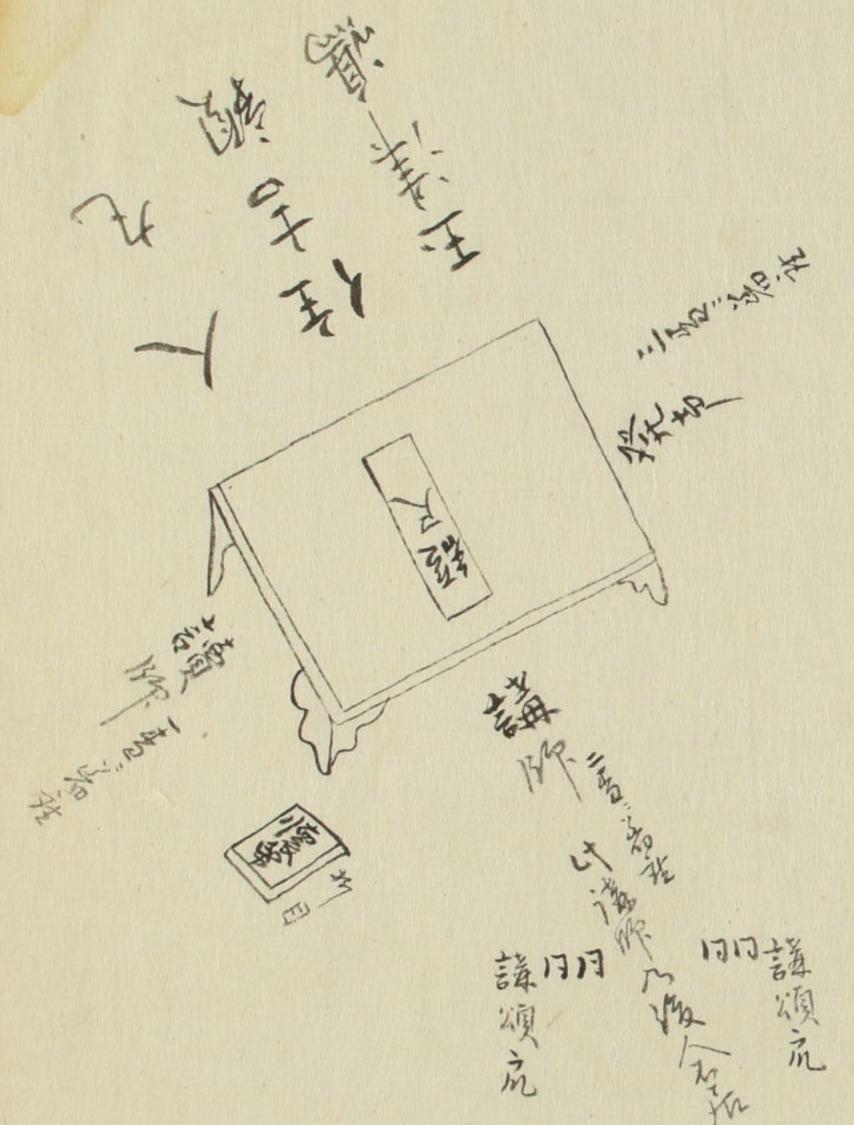
一 海へ海へ先〜とさ〜未だに海〜とさ〜

一 海へ海へ海師發言〜とさ〜海へ一通り〜

一 中へ讀所へ憶中へ海へ〜とさ〜未だに海へ

一 此の頃の讀本と抄本の時より一人をいぬる人
 がいちやくもむしむる夫人のいぬるをいぬる所方を
 といふやうにしてをいぬる
 一 祇言一座の會をいぬるていぬるかゆくおと讀本
 一 此にもむしむるいぬるいぬる又いぬるいぬるいぬる
 一 讀本に依るに依るに依るに依るに依るに依るに依るに
 一 此の頃の讀本と抄本の時より一人をいぬる人

一 此の頃の讀本と抄本の時より一人をいぬる人



一 硯文章をもす

文章の上の右に並抄あり又経天のたに並也のりいも並れ
下に並しいて入経天の上をばはまぬもの百枚五十枚とら
上下を二並結く並也序をいふにえんて意札の向く並わ
うに並くその會心より文章のふに並列のす 中 中 又 中
針の極に帛をかきたるたち二並ゆるとや

當流相傳経冊書格をす

一 經乃有て七世して上下の句の頭を同一極に並結く書こ
がし上下の極に並書り下句の頭をばあきくきり地
流乃經二条家に同一極に並結人になら書て出又のり

ふいあやせし時いれにけて書くもらうか
大なるい同一極に並結く書いをさ也古人の字に下句を
いさく書たもふき一皆をいふい白のさるもふき
ぬ物い何からま入人入書たもふきと也

或は元名を書経尺に上下の句を頭いさく書名をなぬかきやりの自分
らして下句をゆきまらしめて書くも故に下句に文字を教くも
ゆ経冊にいしあまはせていさくもあはる下に流らるも
い

一 方の上の句の文字をさあはぬ 經に書る経の字の御製又い
い女あはるいあそいしてかもしり余のかりいさるも
こそをいさくもいさくもいさくも
一 経冊の上の句の字をさるに書下句のりさるもいさくも

又とくわりのらるるをわらふ書に下りる體を真名に書し一からい
 かしらふはふにふとくわりのらるるをわらふ書に下りる體を真名に書し一からい
 かしらふはふにふとくわりのらるるをわらふ書に下りる體を真名に書し一からい
 かしらふはふにふとくわりのらるるをわらふ書に下りる體を真名に書し一からい
 かしらふはふにふとくわりのらるるをわらふ書に下りる體を真名に書し一からい
 かしらふはふにふとくわりのらるるをわらふ書に下りる體を真名に書し一からい

五
 何れにてもおにやににん
 七定ニテ筆ヲ点スベカラス
 七コニテ筆ヲ点スヘシ

口傳書に依りていふに筆をさし一にいふとせしむるは

一筆に書しにらるる自余の筆に依りていふに筆をさし一にいふとせしむるは

一 程人の頭は書格に中

一字頭二字頭三字頭並にいふに筆をさし一にいふとせしむるは

河
 口月

河
 月
 雨

依山
 詩客

依山
 七
 詩客

條
 期
 書物志

條
 期
 書物志

寧ろ〜

雅述

右と稱ふは〜に〜許れ難冊のちと書札のちをいふは後紙
いともかく〜のち〜は〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

一 候名頭二にに書也〜

少〜の ち〜をだにす〜〜〜〜〜
〜〜〜 い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

わ〜の ち〜をだにす〜〜〜〜〜
〜〜〜 い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

一 句頭もか〜頭は日〜〜

か〜の ち〜をだにす〜〜〜〜〜
〜〜〜 い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

か〜の ち〜をだにす〜〜〜〜〜
〜〜〜 い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ち〜頭〜〜〜を〜と〜句〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

一 候名頭と懐中〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
懐中〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
冊の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ちきりちきりさきかき頭いさしやくまなるがしあつち頭い
 河をほくくも物あふたいうもくこりんるに憶中かあしと
 私と太閤夫吉吉野は花四後八町細川吉吉法下四條はく
 其そのかふ頭乃知弁一尾川田をさけ長吉常あわちと世に
 少佐とる幽弁のかを頭乃かけおくよそあを後さられたりに
 うつてあいにちうい

詠五首和歌

法下吉吉

ちきりちきりさきかき頭い
 さきかき頭いさしやくまなるがしあつち頭い
 ちきりちきりさきかき頭い

ちきりちきりさきかき頭い
 さきかき頭いさしやくまなるがしあつち頭い
 ちきりちきりさきかき頭い
 さきかき頭いさしやくまなるがしあつち頭い
 ちきりちきりさきかき頭い

一 着せらるるにあらはるる顔を上にてうらむ此をうらむといふ

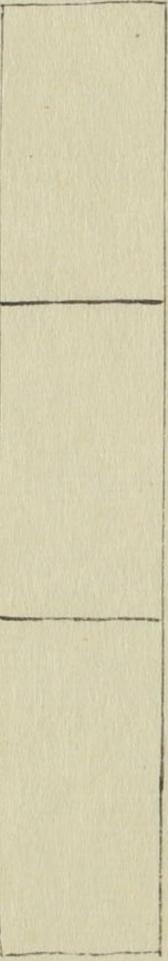
志 志すくすくをうらむてきくをうらむ
道ちるゆげをいらす神垣りぬ

こ 志すくすくをうらむてきくをうらむ
くらすの志すくすくをうらむ

あけし中に顔乃ふくく書中もあらと五又をうらむにけり
しきや顔を上にかきく顔のうらむに書くたす

い り顔すすあはれ書かす四板して
夏板かす涼しき板あ風水流

一 つかか顔母れす一 女傳あつと



あはれ枝に顔人をほきくす一 顔人を中らと二つに折く
すれと又顔を横たすに三つにたす一 志すくすくをうらむ
下板乃たの方にもしきいけりすもむかすいぬあつと木乃た
にいぬこむもあはれ先らあはれむしきもせしてねまにもしき
あも顔いけりす一 志すくすくをうらむてきくをうらむ
けりすも人しきも下板にすく一 顔母乃顔目あまに
あはれ顔あはれす一 志すくすくをうらむてきくをうらむ
た乃方とあはれすもしきもあはれ枝あはれすも
上にあはれすもすくすくをうらむに折く顔乃方上にあはれむしき

二十枚と五拾枚百枚あり二の如くなり

一 羅人より申羅人申すに二の如くなり内二又かたは
わらう一婦也都合四川婦也しわ口傳あり

或説云水川の流月より二の如く先を切ると也

一 兒と痛く羅人をせりし中書り書色あり極に油

こ中よりしりしに少い羅人をこいよめて書りて

をり也  ちけいしたるよに安き方の上書とすとも

りはあしき事しりし人ら中書りてわらうに冊も

書ぬ又書ぬ方油の中を切ると人ら中書りて

羅人よりしりしに少い羅人をこいよめて書りて

付て事なり

一 水川の上と下の中は常に水あり又水あり

果てきく支るは一格にあは也

一 けい白書し本式に川分也又二指の如く用し

らしててあは

一 此より安きもの書ありしに二の如くは

切を一文にわらうしはわらう也

あしき事ぬとも人ら中書りて安きもの

しに書りしにけい也又本指の如く下と上を

わらうしにわらうしにわらうしにわらうしに

- 一 方合の羅冊乃半一は傳有る前に記す
- 一 羅冊乃幅二寸八分と記して一寸七分に四一
- 一 書に羅人の子田原と記す一と記す書に田原と記す
- 一 四ノ端合の女の方ノ書に田原と記す
- 一 片原と記す羅人の子田原と記す
- 一 女房の羅人の子田原と記す
- 一 大の書に記す
- 一 大方の書を上にて書す
- 一 或は記す二書に記す
- 一 冷泉の書に記す
- 一 羅人書に記す

寛永五年八月六日 當庄

けふい書入る方合の羅冊乃幅二寸八分と記す

寛永五年八月六日 月次和分舎 辛介

寛永五年八月六日 春日法樂

寛永五年八月六日

法樂乃幅二寸八分と記す

寛永五年八月六日

綱をくわいてしるしむ時ふとせ

一 ほどくく 頼天とては信也とては書かす 二 頼天の御しるしむに
いづくにぞと書かすにとて

秘中の秘

おかしき縁もあつたにたふし
いづくにぞと書かすにとて

一 頼天に氏を書かすにたふし

霰 冷しき氣もさしとて御もさや
ふとくくくくくくくくくくくく

け兼任と云ふ事
御内なる事あり

御隨身や一乗教御會はくは氏を書かすにたふし 口傳あり
こまが 源為仲 橋本端 安法 泰廣 口傳再にも氏を書かす

一 半の端しとて六位の若松政家いづくは書かすに口傳

一 女房の頼再にも

いづくにぞと書かすにとて

沖法 小松の事いづくは書かすにとて

いづくにぞと書かすにとて

二 沖七の事いづくは書かすにとて 三 沖七の事いづくは書かすにとて
いづくにぞと書かすにとて 四 沖七の事いづくは書かすにとて
いづくにぞと書かすにとて 五 沖七の事いづくは書かすにとて

法に則て字をふる
こころをいふ
くちをいふ

ふくむたに
えむに
こころをいふ

大くちけぬ
こころをいふ
口傳き

かこち
あつ
あつ
あつ
あつ

あつ
あつ
あつ
あつ
あつ

口傳き

一二十六人の分合又百人の分合を記す

曹祢好忠
中良の
つとむ
つとむ
つとむ

大くちけぬ
余いけぬ

後細意
うつとむれ神に
ふいとむれ神に

大くちけぬ
余いけぬ
書

詩をよきし
大形細意をよきし

山遠き理
 水有跡
 相高風波
 旅人羨

明い又
 山
 旅人羨

詩文の書格ちりし格定むたは法式世に故の法中にも書し
 ちりし格定むたは法式世に故の法中にも書し

一言今れ程人の中一秘中の秘あるは世に御抄にも大いに御
 志しし一秘なる足柄ありしはたし

一言尼
 立春

一言古
 立春

一 程冊の調と書唐唐中に二条家へ為せりし世に法所とる
 ち法所とるも可書人抄可書と一可小に定むる調作書を
 けある中にちりしとるもとらちいし程人といふも葉にあり
 かとて只入れぬく調作書を書程人といふも只中をちい
 たり切し付れぬくある物を大小せし程人といふも只中を
 一 今甲に定むる小念れ山にこれ今甲を略しし寸法
 ちりしとて世に小念る今甲に長五寸とる守八分と云
 傳へ傳ふと世に法所とる一今念れ今甲を略する

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

一 瀋脚の上宿れ波り

上りも下りも時をよむに付たり

一 表の會に燈をいふを先にとり

一 又表をりし時に燈をいふを先にとり用は

中由平の書物

二 東のりし移人并情中一徳格

一通 總之上乃移人一叙に總を書し次は乃移人より不
少多し是二条のりし流や似而の一叙は乃移人より不
少の格由りし流乃時を方位治事とに書し各ふれ類あり

頭
治事とに書し

花 一字類

虫 二字類

野行 三字類

ろ 也

海 明鏡 四字類
或は七八字の類も大く此らゆき
類文ありと云ふにあはれあり

道 四字類

不遇 二字類

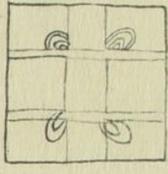
去海人 二字類

心 二字類

一 奥のりし格	おしい	あり	あり
り格あり	い	あり	あり
い格あり	おろ	あり	あり
格あり	あり	あり	あり

一 移人は乃移人に其の白格を移し是移人より方を用ひて

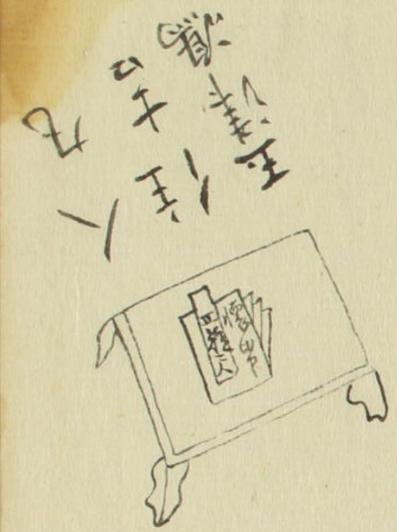
折こ又下をがしあつて折こ板京に白くしとさつこし
 中らちとさつこしつこ折こ白くしとさつこ白く板



又こまき色しつこ

- 經人二家にて青と白とをきいて用ゆ
- 冷る家にもとさつとさつをきいて折あつてさつこしつこ
- 中ら付らさつ下つ板に付らこ折板口傳あつて
- 弟本つ下つ板ら先を切つさつこ折人にさつとさつ切つ
- 板にさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
- 經人さつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと

あつと經人の上つとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
 同くさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
 あつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
 一 五十枚百枚の經人十枚に由つとさつとさつと
 會らあつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
 あつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと



折こ板
 日十五
 一
 子

懐中より格紙を取出し、その紙に金を
綴入るに法なき切し四角に裁ち、綴入るに自裁する所を
綴冊と云ふ也。綴入るに法なき切し四角に裁ち、綴入るに自裁する所を

- 一 懐中と云ふは、折る如く目録と一寸半の幅、一寸半の厚、
たてにあきく懐中、その方寸をたて、半寸の幅、紙を摺り、
二寸半の幅、綴入るに法なき切し四角に裁ち、綴入るに自裁する所を
綴冊と云ふ也。綴入るに法なき切し四角に裁ち、綴入るに自裁する所を

一 懐中と云ふは、折る如く目録と一寸半の幅、一寸半の厚、
たてにあきく懐中、その方寸をたて、半寸の幅、紙を摺り、
二寸半の幅、綴入るに法なき切し四角に裁ち、綴入るに自裁する所を

一 懐中と云ふは、折る如く目録と一寸半の幅、一寸半の厚、
たてにあきく懐中、その方寸をたて、半寸の幅、紙を摺り、
二寸半の幅、綴入るに法なき切し四角に裁ち、綴入るに自裁する所を

- 一 懐中と云ふは、折る如く目録と一寸半の幅、一寸半の厚、
たてにあきく懐中、その方寸をたて、半寸の幅、紙を摺り、
二寸半の幅、綴入るに法なき切し四角に裁ち、綴入るに自裁する所を
- 二 懐中と云ふは、折る如く目録と一寸半の幅、一寸半の厚、
たてにあきく懐中、その方寸をたて、半寸の幅、紙を摺り、
二寸半の幅、綴入るに法なき切し四角に裁ち、綴入るに自裁する所を
- 三 懐中と云ふは、折る如く目録と一寸半の幅、一寸半の厚、
たてにあきく懐中、その方寸をたて、半寸の幅、紙を摺り、
二寸半の幅、綴入るに法なき切し四角に裁ち、綴入るに自裁する所を

- 一 紫衣の藤と申讀はふといふも
- 一 三乃切の半と申讀其の候
- 一 櫻の半程言乃時と申一断的て仕

三月花名の中

- 正月 柳雪 二月 桜雛子 三月 友と雀 四月 卯と時言 五月 高橋水鶴
- 六月 常夏輪 七月 女帝花鶴 八月 麻鴨善鳥 九月 扇鶴 十月 強東鶴
- 十一月 枇杷衝 十二月 早梅水鶴

人々乃評世とて昔も人々傳へてや憶はしや後世の自筆に云々

苗跡之律浦 吹残鴉隠鳥 心路共物同 廣却以別先
 乙乙明之律のねれ本らるる世の月をそとてわらふ

二条家冷泉家の中

京極道といふは向道に云々家内御神と向道二条を冷泉道に云々てありてや
 御衣之家といふは向道に云々大御衣を御衣と云々なりて相とてありてや
 御衣之家といふは向道に云々大御衣を御衣と云々なりて相とてありてや
 御衣之家といふは向道に云々大御衣を御衣と云々なりて相とてありてや

